

第16回ふくいジュニア文学賞

第16回ふくいジュニア文学賞(福井新聞社、県小中高校教育研究会国語部会主催、(財)三谷市民文化振興財団特別協賛)の審査会がこのほど行われ、大賞に前田真紀さん(進明中2年)のエッセー「猫が教えてくれること」が選ばれた。県内の小・中学、高校生合わせて1434人から小説、創作童話、エッセー、詩、短歌、俳句の6部門に計2139点の応募があった。

児童文学者の藤井則行さんを審査委員長に、小中高校の各教育研究会国語部会長を務める川上貴美子さん、畑光枝さん、西永嘉和さんの4人が審査し、大賞1点のほか優秀賞16点、秀作36点、佳作46点を決めた。大賞の前田さんの作品を紹介する。
また、大賞と優秀賞作品を集録したタブロイド版作品集を、県内各校に配布する。

大賞

エッセー部門

「猫が教えてくれること」



福井市進明中2年

前田 真紀

一、たまには無意味なことをしてみる

一、自分の気持ちよさをまず優先する

一、自分の能力に限界を決めない

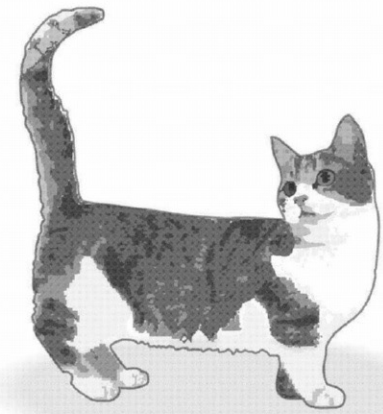
録画したドラマの合間に流れるコマシヤルをぼーっと聞いていた時、そんな言葉が耳に入った。その時は聞き流していたが、何となく頭の中にその言葉が残っていた。あとでやっぱり巻戻して聞き直してみた。それは、キャットフードのコマーシャルだったらしい。アメリカンショートヘアのかわいい猫が画面に映っている。猫か・・とまた、ぼーっとしながらいろいろ考えてみる。

私は猫が好きだ。晴れた日に、のんびりと日なたぼっこをしていたり、ペロペロと自分の手を舐めている姿を見ると、ほっとする。自由な姿を見せてくれるのが、猫の一番好きなところだ。

そんな猫なのに、「たまには無意味なことをしてみる」ような気分の時があるのだろうか。ぼてぼてと猫が外を歩く様子を見る限り、ストレス発

散のようなことをしたくなる。ささいなことをストレスにしてみようかと、ささいなことでも気持ちよさと幸せを感じる猫。自分よりも猫の方が優れている、高い所から見下ろされているイメージが、頭の中に描かれた時、ちよっと・いや、けっこの先に楽しみなことがない状態の時はやる気がない。しかし、自分で「楽しんでみる」というのが下手だという、自分が言うのもなんだが困った性格だ。それで、ささいなことでもストレスがたまるとか、鉛筆の芯を折ったり、おかしをやけ食したりしている。こんな私ほどではないだろうか、猫でもストレスを発散したくなる時があるのか。あるなら、どんな時にそうなるのだろうか・・。

しかし、自由だからこそ発散しなくても大丈夫な理由がある。それが、「自分の気持ちよさをまず優先する」である。朝、道にねころがってあくびをする、暖かいこたつの中で丸くなることなど、ささいなことでも気持ちよさを感じ、小さな幸せをいっぱいに得て



けてジャンプした。が、前足がギリギリで塀の上に乗っただけで、完璧には乗り移ることができなかった。私は思わず「ドンくさっ」と思い、半ばあきれながらその猫の様子をみていた。猫は案外簡単そうにするりと塀の上へ乗り、奥の方へ行って見えなくなってしまう。近くで、「ドンくさっ」と思っていた人は「あ、さすが猫。こういう性格だもんな」と思うだけだったが、今思うとすごいことだと感じている。周りの目など全く気にせず、自分の道を進んでいく。そんな猫の行動には、本気で感心してしまっている。

猫を見ていて、これから変わろうと思ったことがたくさんある。周りから見れば、猫というのは気分屋、気まぐれなど、良いイメージだけではない様に思われているので、猫を見て何を変わるうと言うんだとか、こちゃこちゃ言う人もいるかもしれない。でも、周りなんか知るか！である。周りの人の目気にしすぎて何もしない人より、周りの人の目なんか気にせずに思い通り突き進んでいく猫の方がよっぽどいいよ、と、口を出した人に答えてやろうと心の中で今、決めた。

何ぞ、どう書くか！これはあらゆる文章表現に共通する課題です。が、これだけでは十分で、もう一つ大事な要素があります。それは何のために書くかという目的です。言い換えるならば、この文章を誰に読んでもらいたいのか、何を伝えたいのか、何を訴えたいのか、という作者の目的意識が強いほど、それが書く力となって人の心を打つ文章が生まれます。

さういふ小中学生の若しし力のこもった文章との出会いを求めて、総数2139点の作品を、4名の審査委員で丁寧に拝見していきました。そうして、99点の入賞作品が選ばれました。おおよそ20人に1人の割合です。さういふ選考です。

さういふ中から、小説と創作童話とエッセーの3点が、大賞候補に挙げられました。いずれも甲乙つけがたい作品でしたが、最終的にエッセーの「猫が教えてくれること」に決まりました。何より着想のおもしろさと確かな筆力において抜き

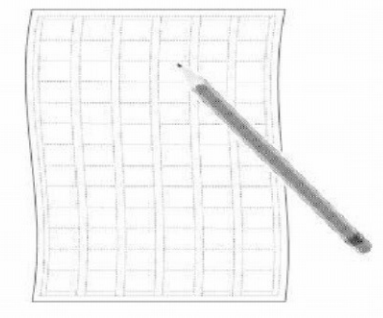
総評

審査委員長 藤井 則行

んでいました。エッセーの大賞は13年ぶり2回目の受賞です。

エッセーは、小説や童話に比べて書きやすい文章と思われているようです。自分の体験や疑問を題材に、感情を交えて記した文章といわれています。しかし、だれにも書きやすいと思われているエッセーにこそ、何を何のために、どう書くかの工夫が要求されます。「猫が教えてくれること」は、それらに十分応えたエッセーに仕上がっています。その事は、書き出しからすでに勝負しているといっても言い過ぎではありません。何気なく耳にしたコマシヤルの文句と、猫の動態を結びつけながら、要するに自分は猫にも愛する存在かも知れないと、自分を見直して、展開が爽いおもしろみ(ことです。小説や童話とはまた違ったおもしろさで書き方、それこそ教えてくれる優れたエッセーの誕生に拍手をおくりたいと思います。

(児童文学者)



名エッセーの誕生に拍手